

# ブレンターノと労働者問題

面 地 豊

## I 序 論

ル ヨ ・ブレンターノ (Lujo Brentano) は、1877年『労働関係 (Das Arbeitsverhältniss)』という書を著わしている。彼はこの著書の中で「労働者問題 (Arbeiterfrage)」というテーマについて論じている。本稿ではこの著書を手がかりにしてブレンターノが「労働者問題」をどのように把握し、考察を展開しているかを検討することを意図している。

ブレンターノの労働者問題についての思考内容の中に、経営学的もしくは経営社会学的思考が含まれているかどうか、あるいは経営学的もしくは経営社会学的思考に導かれていく萌芽がみられるかどうか、もし、そのような思考が含まれているか、萌芽が見られるとすれば、それはどんな点においてであるか。ブレンターノの労働者問題についての思考が経営社会学の生成にとって関連があるかどうか、関連があるとすればそれはどのようなものであるか、本稿は、これらの問題を明らかにすることを意図している。

## II 労働者問題の生成

労働者問題は、問題とされる労働者（の状態）の存在と、その労働者（の状態）を問題として意識し、思考する理念から構成されると理解される。ブレンターノは言う。「労働者問題は……14世紀の中頃、特殊な労働者階級 (besonderer Arbeiterstand) の生成とともに生じた」<sup>1)</sup> と。ブレンターノは、問題とされるべき労働者の存在を14世紀の中葉以降のものとして把握す

1) Lujo Brentano: Das Arbeitsverhältniss, Leipzig 1877, S. 173.

る。14世紀の中葉についてブレンターノは言う。「ツンフトが経営事項 (gewerbliche Angelegenheit) の管理 (Verwaltung) の独立性を得るまで、即ち、概ね14世紀の半ばまで、特殊な労働者階級は決して存在しなかった」<sup>2)</sup> と。ブレンターノは、特殊な労働者階級の生成をツンフトの発展と結びつけて理解する。

ツンフトの形成についてブレンターノの叙述に従ってみよう。ツンフトはギルドから排除された手工業者を中心に形成された。ギルドは、彼等の自由や物質的利益 (Interesse) を守り、司教や領主から独立を勝ち取った。しかし、ギルドが勝ち取った権力 (Macht) は都市住民のすべてに移行したのではなかった。権力は、一定の価値ある都市の土地所有者、古いギルド、都市貴族に移行した。そして都市が繁栄し、裕福になるにつれて著しい社会的差異が生じた。都市の独立のために大きく貢献した手工業者は、独立を勝ち取った後、独立の享受から除外され、自由がおびやかされ、彼等の物質的状态は劣悪なものになった。手工業者の中の最も身分の高い層や自営農民は、彼等の劣悪な状態を改善し、彼等の権利や利益の侵害に対する保護手段としてツンフトを形成した。

この新しい組織ツンフトは、隷属的な手工業者の生活を向上させた。職人は、いずれは親方になったので職人と親方の間にはまだ社会的差異は存在しなかった。職人は完全な権利をもつ (vollberechtigt) 成員としてツンフトに属しており、ツンフトの総会 (Zunftversammlung) においては、親方と一緒に手工業秩序に関して協議し、決定した。それは「資本の所有が労働以上にツンフトに刻印を与えなかった」<sup>3)</sup> からである。

しかし、このことは手工業が発展し、手工業者の富が成長するとともに変わってきた。手工業が発展し、より広い販売範囲を獲得するにつれて、資本の投資に対する機会がより大きくなり、資本投資に対する考慮がツンフト秩序において増々支配的なものになった。手工業の発展と手工業におけるより

---

2) a. a. O., S. 29.

3) a. a. O., S. 32.

大きな資本投資は、両者あいまって必然的に多数の農奴を都市に引き寄せた。このことによって、一方では、手工業の発展が必要とするより多数の労働者が調達され、他方、新しい労働者の各々は将来における競争可能性が高まった。資本収益性 (Ergiebigkeit) はこのことによっておびやかされることになった。資本収益性に対する不安は手工業者の独占欲 (Monopolgeist) を覚醒させた。ツンフトは新しく登場しつつある家族の競争を制限する多くの諸規定を公布するにいたった。

手工業者達の公布した諸規定によって、資産も所有せず、親方の息子でもない者、あるいは、親方の娘か未亡人と結婚しない者は、親方になることも独立して経営することも最早やできなくなった。手工業は一定数の家族の世襲財産となり、資本の狭量な嫉妬心は広まり、けちな競争心、悪意ある利己心が、ツンフトがその下で繁栄してきた連帯性 (Association und Solidarität) という良きイデーにかかわって登場しはじめた。「このことは、親方になり、独立して手工業を経営するどんな見込みも決してもたない労働者という特殊な階級 (Stand) の生成に導き、労働者問題に導いた」<sup>4)</sup> のである

徒弟法 (Lehrlingsgesetz) の諸規定は成長しつつある大経営の発展を妨げるものとなった。大経営は、工業経営の自由と、労働契約における法的不介入を要求した。しかし、徒弟法は、一方では、その一連の諸規定によって労働者の状態を耐えられる程度のものに保障していた。

労働者は、徒弟法の諸規定が守られなくなると、彼等にはさまざまなことが生じた。徒弟の数は熟練労働者の数に対して一定の比率であることが規定されていたが、熟練労働者は多くの徒弟にとって替えられ、多数の熟練労働者はその職をうばわれた。1年間の奉公期間 (Dienstzeit) がなくなり雇用の安定性が失われた。労働者は、また、収入の安定性も失われた。市場でのどんな変化も賃金変動をもたらした。毎年、諸条件 (Verhältniss) に相応して賃金を定めていた調停者 (Friedensrichter)、あるいは都市当局者 (Stadtmagistrat) にかかわって、今や雇用者が一方的に賃金を決めるにいた

---

4) a. a. O., S. 38.

った。雇用者が一方的に決めるのは賃金だけではない。その他のすべての労働条件が雇用者によって一方的に決められるようになった。自由の名のもとに、今や、当局による労働条件の規制のかわりに雇用者による労働条件の一方的決定が出現するにいたったのである。

かくして、大都市の発展した手工業においては、14世紀末以降、親方と職人の分離は増々大きくなった。古い手工業秩序の解体とともに労働者大衆の労働や生活の状態は劣悪になり、他方、同時に時代の一般的見方 (*Anschauung*) は、労働者の要求を高める労働者の権利を承認した。「今日の労働者問題がここに生ずる」<sup>5)</sup> のである。労働者問題は、特殊な労働者階級としての労働者の劣悪な状態と時代の一般的な見方が結びついて生じたのである。

ブレンターノは言う。「14世紀において特殊な労働者階級が生成して以来徐々に発展してきた労働者問題は、19世紀においてその危機に達した」<sup>6)</sup> と。理論的には、労働者階級の文化的恩恵に対する参加の権利 (*Berechtigung*) と労働者の自由が承認されたが、他方、労働者は、実際においては、諸関係 (*Verhältnisse*) を通じて自分達がこの参加から除外され、他者に対して従属していることを見出した。必然的に、労働者階級の中に現実を彼等の権利と一致させ、独立を獲得し、文明の進歩に対する参加を保障しようとする努力が生じざるを得なかった。労働者は、生成しつつあった産業貴族 (*Industriebaron*) の圧迫に対して労働組合 (*Gewerkverein*) を形成した。労働組合は、あのギルドの目的と同様に、独立と権利の維持、工業的・社会的自衛権の……秩序あるシステムの維持を目的としていた<sup>7)</sup>。

労働者の生活状態を大きく改善させたものに消費組合 (*Consumverein*) があった。しかし、ブレンターノは言う。「消費組合の労働者の生活改善努力は、労働者と雇用者の関係 (*Verhältniss*)、すなわち、労働者問題の発火点 (*Brennpunkt*) に触れるものではなかった」<sup>8)</sup> と。労働者の生活状態は、

---

5) a. a. O., S. 44.

6) a. a. O., S. 77.

7) a. a. O., S. 53.

8) a. a. O., S. 99.

労働契約の諸条件の確定に際して直接に規定される。消費組合の活動は、この労働契約の場面には触れるものではない。消費組合は、労働者が企業において賃金のために労働するという点において何かを変えようとするものではない。労働組合は、先づ、労働者をして労働契約を結ぶに際して、他の商品販売者が彼等の商品の販売においておかれているのと同じ状態におこうとする。消費組合は、労働者の生活状態において労働に関わらない場面での生活領域に関わる。ブレンターノは、労働者問題の「問題性」を労働契約の場面、労働者と雇用者との関係の中に第1の手がかりを求めようとする。ブレンターノが労働者の生活状態を問題として取りあげ、その問題の発火点として労働者と雇用者の関係の場面を捉えているという点で、ブレンターノの思考にはブリーフスの思考と共通なものがみられる。ブリーフスは言う。「社会不安の熱い火床としての経営それ自身」<sup>9)</sup>と。ブリーフスの言う社会不安の本質は労働者の不安を意味している。労働者の不安は労働者問題の中に含まれるものである。ブリーフスにおいても、労働者問題の発火点を経営の中に見ているのである。ブレンターノにおいて、労働者と雇用者の関係の場面を労働者問題の発火点として捉えられていることは、労働者と雇用者の関係の場面が経営の中に在ることから、両者の思考が経営の場면을重視している点において共通しているといえることができる。

1814年の徒弟法の廃止とともに行なわれた近代的な経済法は、労働の中に労働以外の他のすべての商品におけるように1つの商品のみを見、労働者の中にこの商品の販売者のみを、雇用者の中にこの商品の購買者のみを見る。近代的経済法は……労働者と雇用者の法的平等を承認した<sup>10)</sup>。労働者は、しかし、個別的には彼等の希望する労働条件を雇用者が拒否した場合、労働者達の商品を市場から引きあげることも、また、一般に彼等の労働の供給をその需要に適応させることはできない。したがって、労働者には、労働契約の自由は決して存在していない。雇用者が一方的に労働条件を決定し、労働者

9) Goetz Briefs: Betriebsführung und Betriebsleben in der Industrie, Stuttgart 1934, S. VIII.

10) Lujo Brentano: a. a. O., S. 120.

の困窮であることが労働者をしてその労働条件に服従することを強いる。労働組合は、労働者をして労働契約を結ぶに際して雇用者と労働条件について交渉し、労働者の供給を需要に適合させようとする。

労働条件の最も重要なものは雇用者が支払うべき賃金である。労働組合は、労働の販売に際して、労働以外の他の商品の販売と同じような販売条件を労働者に主張することを可能にさせようとし、市場の好条件が現われると直ちにその条件を利用し、あまりにも低い買い値の場合には商品の販売を差し控える可能性を労働者に与える。ブレンターノは言う。「労働組合の努力は、労働時間を短縮させ、労働者の生活を安定させ、安全にして整然としたものになるように方向づけようとする。賃金に関しても、賃金の高さだけでなく、労働給付の仕方 (Art und Weise), 賃金支払いの形態 (Form der Lösung), 労働日の長さ, 見習いの数, 労働における労働者の人格 (Person) の保護, 上位者に対する労働者の保護, ……など, 労働関係のこれらすべての諸条件は、労働者の生活にとって決定的に重要である」<sup>11)</sup> と。これら労働諸条件は、以前には労働の購買者によって一方的に決められていた。労働組合を通じてこれら諸条件の規制において、労働者の利益 (Interesse) を労働契約の中に有効にはたらかせることが可能になる。ブレンターノの労働者問題把握において、経営的要素——例えば上位者に対する労働者の関係, 労働における労働者の人格等々——が視野の中に入れられ、したがって、経営学の認識対象に含まれる事項が思考の中に取り入れられているのである。しかも、それらは、労働者の生活にとって決定的重要性をもつものとして取りあげられているのである。

### Ⅲ 労働者問題の構造

労働者問題は、特殊労働者階級の生成と彼等の現実の状態を問題として意識し、取りあげる立場あるいは理念とが結びついて生じた。労働者問題は、特殊労働者階級を問題として取りあげる「仕方」によって問題の「内容」や

---

11) a. a. O., S. 125~126.

「構造」が異なってくる。ブレンターノが労働者を問題として取りあげる理念は、すべての社会階級の文化とその進歩に参加する同権（*Gleichberechtigung*）の思想である。ブレンターノは言う。「すべての社会階級の文化とその進歩に対する参加の同権は、18世紀の終り以降、すべての文明国の世論によって承認された。人が労働を労働以外の他の商品と同じように1つの商品とみなし、労働者を商品販売者以外のなにものでもないものとみなすのは、全く近代的な生活を支配しているこの基本認識（*Grundauffassung*）の1つの結果にすぎない。というのは、それによって労働者の人格的自由（*persönliche Freiheit*）と労働者と雇用者の法的平等が労働関係の秩序の基礎（*Grundlage*）とされたからである」<sup>12)</sup> と。ブレンターノは、同権思想が労働者の人格的自由と、労働者と雇用者の法的平等が労働関係の秩序の基礎であると思考する。ブレンターノは、労働者問題は労働関係において生ずる問題であり、労働関係の秩序が労働者の人格的自由と、労働者と雇用者の法的平等によって基礎づけられていない問題として把握する。

労働関係、すなわち、雇用者と労働者の関係において労働者の人格的自由と法的平等が実現されていない根拠を、ブレンターノはどのように把握するか。ブレンターノは言う。「労働者問題は、したがって、所得の高さや確実性、労働時間の長さなどに関する問題につきるものでは決してない。しかし、労働者の人格的自由と、労働者と雇用者の法的平等が立法によって承認されることが実現された今日、尚労働者問題が存在している原因は経済関係（*wirtschaftliche Verhältnisse*）である」<sup>13)</sup> と。ブレンターノは労働者問題の原因を経済関係に求める。そして彼は、労働者の経済的基礎について言う。「労働者の経済的基礎は、労働が如何なる点においても労働以外の他の商品と同じでないこと、労働者は労働以外の他の商品の販売者と同じ状態にないことの中に在る」<sup>14)</sup> と。

ブレンターノは、労働者の経済的基礎を労働以外の他の商品とは異なった

---

12) a. a. O., S. 173.

13) a. a. O., S. 174.

14) a. a. O., S. 182.

労働の特性に求める。ブレンターノは、労働者問題の基礎を、労働以外の他の商品の価格が生産コストのまわりを上下するように労働賃金も労働者の生計費 (Lebenshaltung) のまわりを上下することの中に求めることも、労働が単なる商品として考察されるべきであるとも考えない。ブレンターノは、労働そのものの特性の中に労働者の経済的基礎を求める。ブレンターノは言う。「労働とは、労働力の利用のことである。労働力は、しかし、人間が肉体、知性、感情を——というのはこれら3つのものすべてが労働において協力しなければならないから——経済財の獲得のために利用する限り人間それ自身以外のものでは決してない；労働は、したがって、人間それ自身の利用以外のものでは決してない」<sup>15)</sup> と。ブレンターノは、労働を労働力の利用として捉え、労働力が人間それ自身であるとの理解から、労働を人間それ自身として把握する。ブレンターノにおいては、労働は人間それ自身であり、このように理解された労働そのものの特性の中に労働者問題の経済的基礎が求められるのである。換言すれば、労働者がその中におかれている人間としての状態の在り方、特性に労働者問題の経済的基礎が求められる。

労働の、労働以外の他の商品との差異はどのように把握されるか。ブレンターノは、資本と労働との対照を通して両者の差異を明らかにする。

資本の利用は、資本との密接にして不可分な関連の中に在り、資本の運命はその利用を通して完全に規定されている。この利用は、資本に対する完全な支配なしでは全く不可能である。全く同じことが労働と労働力との間の関係についても言える。他人に自己の労働を売りわたした者は、そのことによって他人に彼の労働力に対する支配を賃貸する。しかし、労働と資本の間には、その利用について次の点で異なっている。その利用が商品である資本は、それ自身もまた商品である。それは、所有者と全く別の何か (Gesondes) である。それは、所有している者によって、あるいはその前任者 (Vorgänger) によって一定の目的に奉仕するために、その所有においてはじめて任意に生産され、その所有者は、それ故、利用されるものの实在

---

15) a. a. O., S. 183.



(Dasein) に対して、その利用のつけ値 (Ausgebot) に対して同じように責任がある。

しかし、労働者についてはこれとは全く異なっている。労働力は商品ではなく、人間それ自身以外のなにものでもない。それは所有者によって任意に生産されたものではなく、所有者はそれの実存に対して責任はない。両者は1つの不可分の統一体 (Einheit) として、共に (zusammen) 自己の意思とは独立に世界に現われる。しかも、人間はそれ自身の外部の目的になるのではなく自己目的である。ブレンターノは言う。「資本においては、売り手は、その利用が売られるところの、利用されるものとは異なった何かであるのに対して、労働においては、売り手はそれ自身、その利用が売られるところの利用されるものと同じである。この点で両者は異なっており、また、資本においては、利用されるもの、すなわち、資本はそれ自身商品であるのに対して、労働においては、利用されるものは商品ではなく自己目的であり、全経済システムを中心である点で両者は異なっている。しかもこれは重要な差異がある」<sup>16)</sup> と。ブレンターノは、労働力が人間それ自身であると把握し、労働の中に自己目的としての人間、全経済システムを中心としての人間を見出し、それを強調するのである。我々は、ここにおいて、労働者問題が単なる賃金問題、経済問題としてではなく、経済問題の基礎、あるいは中心にある人間の問題として捉えているブレンターノの思考を見ることができる。そして、ブレンターノは、労働が労働以外の他の商品とも区別される本質的メルクマールを「労働の、その売り手の人格との絶対不可分の結びつきの中に」<sup>17)</sup> みているのである。

労働者は概して貧しい。彼等は、彼等の労働を売ること以外に彼等の生命をつなぐものを決してもってはいない。労働者は、如何なる賃金も、如何なる労働条件も甘受せざるを得ない。そして、彼等の商品と彼等自身との密接不可分な関係の故に、彼等自身に対する如何なる支配も甘受せざるを得ない。ブレンターノは言う。「労働の売り手の人格と労働との不可分な結びつきと、

16) a. a. O., S. 185.

17) ebenda.

労働の売り手の一般的貧困は、決定的な、倫理的、経済的結果をもたらす」<sup>18)</sup>と。ブレンターノにおいては、この決定的な、倫理的、経済的結果が労働者問題として取りあげられるのである。自己目的であり、経済の全システムの中心である人間が、労働者において、労働関係の中で、雇用者の支配の対象となることが問題として取りあげられるのである。労働の買い手は、同時に労働の売り手の人格の所有を獲得し、売り手の行為 (Tun und Lassen) を規定する。この関係 (Verhältniss) は、しかも一時的なものではないのである。ブレンターノは言う。「労働者の、彼の人格の買い手に対する従属性は、その買い手が労働者の人格の滞在場所 (Aufenthaltssort) について規定するだけでなく、労働者が彼の時間を使用する仕方についても規定することによっても現われる」<sup>19)</sup>と。労働の売り手は、買い手に、買い手が売り手を必要としている場所に人格的についていかねばならない。彼の労働力の利用の場所は、売り手の人格の滞在場所でもある。ブレンターノは言う。「この場所を決める者が労働者の全実存 (gesamntes Dasein) に対して有している支配は特別のものがある」<sup>20)</sup>と。労働者は、彼の商品売る限り、肉体的にも精神的にも拘束されており、同時に、一定の時間 (Zeitraum) 売らねばならない。この時間の決定は、しかし、すなわち、何時間労働がなされるべきか、超過労働時間、夜間労働時間がなされるべきかの決定は、同時にまた、労働者の肉体的消耗に関しても決定する。労働者が、彼に、彼の精神的、道徳的教育 (Bildung) のために提供されている機会を利用することができるかどうかは、この決定に依存している。

この決定は更に労働者の家庭生活、子供の教育、労働者の政治的義務の遂行などに関しても、約言すれば、労働者の全生活 (ganze Dasein) に関しても規定する。ブレンターノは、労働者の被拘束性、被支配性の労働者の全生活に対する影響を重視するのである。このことは、労働者の被拘束性・被支配性の時間と空間 (労働者の滞在場所) が経営のそれであることから、経

---

18) a. a. O., S. 186.

19) a. a. O., S. 187~188.

20) a. a. O., S. 189.

営の労働者の全生活に対する意味の重視に結びついていることを意味している。経営の労働者の生活に対する意味が重視されているという点でも、ブレンターノのこの思考は、ブリーフスの思考に結びつくものをもっている。

ブレンターノは言う。「労働の、労働以外の他の商品との差異は……その売り手に対して深刻な倫理的影響を有しているという点にある。労働の購買は同時に労働者の全人格に対する支配を与える。……それ故に、労働の販売条件を誰が決めるかということは非常に重要である；というのは、労働の販売条件を決定するものは、同時に労働者の全存在に関するあの支配の程度と仕方を決定するからである」<sup>21)</sup> と。労働者問題は、労働の販売条件を誰が、どのように決定するか、という問題に関わることになる。すなわち、労働契約が如何に結ばれるかということが労働者問題の在り方を規定する。ブレンターノは言う。「労働がその売り手の人格と不可分に結びついていることと、労働者が一般に経済的に貧しいということは、個々の労働者から労働の販売条件に対する如何なる影響力をも奪い取ってしまうという結果をもたらす」<sup>22)</sup> と。労働以外の他の商品の売り手は、その供給を需要にあわせることをつねに意のままにしており、したがって、一定の価格で売らないのみならず、彼等の商品を多く；あるいは少なく売ることも意のままにしている。労働の売り手は、労働者がその貧しさの故に、一般に彼等の労働を売ること以外に彼等がそれでもって生活できるものをもっていない。個々の労働者は、彼等の生命をなんとか続けていくためには、つねに労働を売ることを強いられる。あるいは、労働者は、彼等の商品を将来のより有利な市場のために保持することはできない。彼等は、価格の上昇を期待している間食べていくすべをもたない。彼等には、彼等に提供されている諸条件の下に従うこと以外に何ものも残されていない。しかも、この諸条件は雇用者が決める。労働者の商品価格を決めるのは雇用者なのである。そして、「労働者が受け取る価格を決める同じ強制が、その他のすべての労働の諸条件に関して決める」<sup>23)</sup>

---

21) a. a. O., S. 193.

22) a. a. O., S. 194.

23) a. a. O., S. 196.

のである。ブレンターノは言う。「個々の労働者それ自身は賃金に対して影響力をもたないことが労働者問題の基礎である」<sup>24)</sup> と。ブレンターノの思考は、賃金に対する影響力の場面、したがって、また、賃金以外の労働条件が決定される場面へと導かれていく。ブレンターノにおいては、労働者問題とは、労働者が労働契約を結ぶに際して労働者が如何に、どれだけ影響力をもつかの問題でもある。

ブレンターノは、労働者が労働契約を結ぶに際して影響力をもつ方法として連合 (Koalition) を主張する、ブレンターノは言う。「労働者にとって連合による保護は、法律による保護よりもはるかに望ましいし、有効であり、实际的 (sachentsprechend) である」<sup>25)</sup> と。労働者は連合を通じて、労働以外の他のどんな商品の売り手もおかれているのと同じ状態におかれる。労働者は、連合を通じて労働者の商品の市場での供給に対する1つの統制力を得る。労働者は、連合を通じて彼等の商品を留保をもって供給し、その販売条件の決定に参加する (mitsprechen) ことができる。労働者は、連合を通じてはじめて本来の商品となり、本来の商品販売者となる。しかしながら、ブレンターノは言う。「労働組合は、労働の商品としての特性、すなわち、その商品の売り手の人格とその商品との不可分の結びつきを除去することはできない」<sup>26)</sup> と。ブレンターノは、労働者問題を解決する方法として労働組合を持ち出すが、この方法は労働の商品としての特性を止揚する方法ではない。労働の商品としての特性を可能ならしめている資本主義経済体制を止揚する方法をブレンターノは思考しない。この点でマルクス主義的思考とは異なる。ブレンターノは、労働者に対する労働契約における不利な諸影響を除去する方法として労働組合をもち出すのである。労働組合は、むしろ、一方では労働者をして彼等の労働を実際に商品として取り扱い、他方では自身、現実には人間的な生活 (menschliches Leben) を営むことを可能にさせてくれるものとして思考されるのである。労働者は、労働組合を通してはじめて

---

24) a. a. O., S. 211.

25) a. a. O., S. 215.

26) a. a. O., S. 231.

彼等の商品の価格，すなわち，彼等の所得が彼等自身に依存するものとなり，彼等が文化に対する参加の程度が彼等自身に依存するものとなる。労働組合を通してはじめて労働者は意志をもってその両者を高めることができると思われられるのである。ブレンターノは言う。「賃金基金の容赦のない限界が賃金の上昇に限界を設けるのでは決してない；賃金の上昇を通じて労働者の所得を，他の社会階級の所得を犠牲にして高めることは労働者に可能である；賃金の確定（Feststellung）は，ただ権力問題（Machtfrage）である」<sup>27)</sup>と。ブレンターノは，労働者問題の中心的，基礎的問題である賃金問題を，賃金基金説のように純粹に経済学的問題として把握するのではなく，権力問題として政治的に把握するのである。

ブレンターノは，経済は人間のより高い目的のための1つの手段であり自己目的ではないことを強調する。ブレンターノの経済に関する思考は，したがって，その背後に，自己目的としての人間を中心にすえた思考に支えられているのであり，この限りにおいて経済に関する思考は展開されるのである。ブレンターノは言う。「あらゆる経済活動は，それが個人のそれであれ，国民全体のそれであれ，より高い目的のための1つの手段であるにすぎない。経済はそれ自身のために生じたのではなく，そして経済が自己目的として営まれるところでは正当化されない」<sup>28)</sup>と。経済は人間の欲求（Bedürfniss）に奉仕するために形成され，国民の個々人の，また国民全体の道徳的，知的健康の必要なる前提が，物質的健康の中に在る限りにおいてのみ経済の富への努力が正当化されるものと思われられる。賃金の上昇，労働時間の短縮は必ずしも労働者のより大きい，肉体的，知的，道徳的善や文明の恩恵に対するより大きい参加（Beteiligung）に導くものではない。生活の向上を結果する賃金上昇と労働時間の短縮のみが労働者階級を高め，改善の達成を主張することができる。ブレンターノは言う。「生活（Lebenshaltung）は，したがって，賃金上昇と労働時間短縮の正当化の判断基準である」<sup>29)</sup>と。ブレン

---

27) a. a. O., S. 262.

28) ebenda.

29) a. a. O., S. 263.

ターノの思考の中心には、あくまでも自己目的としての人間がおかれているのである。そして、労働者問題は、どこまでも自己目的としての人間を基準として思考されるのである。

#### Ⅳ 結 論

ブレンターノの「労働者問題」についての思考を導く原理は「同権思想」である。「すべての人間は、文化とその進歩に対して参加するのに同じ権利を有する」という思想がブレンターノの思考する「労働者問題」の基礎をなしている。労働者の人権的自由と、労働者と雇用者との間の法的平等が労働関係の秩序の基礎とならなければならないが、現実においては労働者が被拘束性、被支配性の中におかれていることが、ブレンターノの思考する労働者問題である。

労働者が貧しいことは労働者問題の基本的要素である。しかし、ブレンターノは、労働者問題を単なる貧困の問題としては捉えない。すなわち、ブレンターノは、労働者問題を賃金問題としてのみ捉えない。彼は、賃金以外の労働条件をも含めた労働諸条件の決定の仕方を問題とする。現実においては、雇用者が一方的に労働諸条件を決め、このことによって労働者が雇用者に支配され、拘束されることをブレンターノは問題として取りあげる。ブレンターノは、この点において賃金基金説的視野を超えたところに立っている。

労働者は貧しいが故に雇用者に時間的にも空間的にも拘束され支配される。このことは、労働者が雇用者の目的を実現するための手段の位置におかれることを意味する。ブレンターノはここに労働者問題の本質をみる。ブレンターノにおいては、人間こそが自己目的であり、全経済システムの中心にななければならない。経済こそが、自己目的としての人間の手段なのである。ブレンターノは、経済の基礎に、したがって、経済問題の基礎に人間をおくのである。

ブレンターノは、しかし、労働者が雇用者によって支配され、拘束される現実そのものを可能にしているものを除去しようとはしない。すなわち、ブ

レンターノは、労働者が労働を雇用者に売りわたすという現実そのものを止揚することを思考しない。ブレンターノは、労働者が雇用者に労働を売りわたす仕方を問題にする、すなわち、労働者の労働契約の仕方を問題にし、労働契約における労働者と雇用者の同権を実現することを思考する。ブレンターノの思考は、この点においてマルクス主義的思考とは異なっている。ブレンターノの思考は、革命的思考ではなく、体制内的、体制改革的思考である。ブレンターノにとって、労働者問題は権力問題でもある。ここにおいて、ブレンターノは労働組合の意義を重視する。

ブレンターノの労働者問題思考においては労働関係が視野の中心におかれている。労働関係、すなわち、労働者と雇用者の関係は基本的には「経営」という場における関係である。この意味で、ブレンターノの労働者問題思考は、経営関連的と言える。ブレンターノの思考においては、まだ、経営学的思考と言いうるものはまだ明らかに見られないが、経営学的思考へ導かれていく、あるいは、導かざるを得ない契機が含まれている。そこには、労働者問題が、「一般的なもの」から「経営特殊的なもの」として取りあげられる契機が含まれている。

ブレンターノは言う。「労働者問題は、その理想は目標がすべての人間の最高の完成である、という問題の連鎖における1つの肢体として現われるにすぎない。そして、労働運動は、人間の発展における下位の肢体として現われるにすぎない」<sup>30)</sup> と。労働運動を通して労働関係における労働者と雇用者の同権を実現しようとすることは、ブレンターノにおいては、労働者という自己目的の実現にとって重要な手段として現われる。ブレンターノのこの思考は、労働関係の場である「経営」が労働者の生活にとって重要な要素であるという思考に導きうる契機を含んでいる。労働者の生活にとっての経営の重要性の認識こそ経営社会学の基本認識である。この点でも、ブレンターノの労働者問題思考の中に、経営社会学的思考の萌芽をみることができる。

(おもじ・ゆたか／経営学部教授／1995.5.8受理)

---

30) a. a. O., S. 303.